

森?外の大正期の小説に関する研究 : 大正三年から 大正五年までを中心に

著者	王 晨野
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030373

氏名	王 晨 野
学位の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	甲文第212号（文部科学省への報告番号甲第760号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2022年3月2日
学位論文題目	森鷗外の大正期の小説に関する研究 ——大正三年から大正五年までを中心に——
論文審査委員	（主査） 教授 大 橋 毅 彦 （副査） 准教授 福 岡 弘 彬 細 川 正 義（関西学院大学名誉教授）

論文内容の要旨

本学位申請論文は、森鷗外が大正期に入ってその創作に注力した歴史小説、ならびにそれと並行して発表した現代小説を取り上げ、本論は4部構成、各部に2本ずつの論文を配置した、計8章構成をとっている。以下、各章ごとの論文内容を要約する。

第1章では、歴史小説における史実と虚構の在り方をめぐって、それまでの鷗外の創作方法に一つの転換がもたらされたと評価されてきている「安井夫人」を取り上げ、主人公佐代の人物形象の分析を試みている。具体的には、仲平との結婚によって「繭を破って出た蛾」のように自我を露わに示した彼女が、その人生の終盤にあたって自身の「美しい目の視線」を「遠い遠い所に注」いでいくに至るまで、他者とのかわりを通してそれを抱え続けていくありようを、仲平の生き方と対応させ、鷗外の抱懐するいわゆる「利他的個人主義」を取り込んだ先行研究を視野に入れて考察している。

第2章では「魚玄機」を取り上げ、平塚らいてう主宰『青鞥』に象徴される同時代の「新しい女」論と関連付けられることの多いこの小説が中国の逸話を下敷きにしていることに関心を向け、その典拠ならびに唐代の道教についての調査に基づいて鷗外の意図を推測しつつ、作品の新たな読みに向かおうとしている。すなわち、主人公の魚玄機が、親が「倡家」（歌女を置いて商売をしている家）を営んでいる家の娘と紹介されている逸話を選ばれている点や、当時は道教の正統な修行として認められていなかった房中術（中気真術）が、格式を重んじる咸宜観で取って行われているという場面を用意してそこに主人公を投げ込んでいくという展開には、魚玄機の人生が詩と性をめぐってさまざまなドラマを積み重ねていくことを描き出そうとする鷗外の意図が込められていることを証している。そしてその点を踏まえて、現実と理想との相剋の中を生き抜いた人間像を読み取る方向で論を展開している。

第3章では、この小説の発表と同時に執筆された「歴史其儘と歴史離れ」の存在によってもよく知られる「山椒大夫」を取り上げている。まず初めに、従来の研究が作品の主題系の一つとみなしてきた奴婢解放問題と絡ませて、登場人物の厨子王の人物形象から読み取れる為政者像を考察、次いで安寿と厨子王の母が子供たちに託した「守本尊の地藏様」に着目、この地藏尊が物語の展開上重要な役割を果たす理由として、それには我が子の未来を予祝する母の〈情〉が託されていたからだとする。そして、その〈情〉が母から安寿、安寿から厨子王、さらに曇猛律師をはじめとする他の人々にも伝わっていくことを、彼らの言動の呼応関係に注目しながら読解を進めていき、「山椒大夫」全体には人間に内在する普遍的な〈情〉が流露していると結

論付けた。

第4章では「最後の一句」を取り上げ、題名の由来となっている作品結末部に置かれた娘いちの言葉に、政治不信と献身精神を称える意を読み取ることが小説読解の肝であることが定説であることをふまえながら、論の前半においてはさらに作品世界の細部に分け入り、いち以外の人物も含めた桂屋の家族個々の人物形象、ならびに彼女の取り調べにあたる町奉行佐佐たち官僚機構に与する者たちの人物形象が有している意味について考察している。論の後半では作品結末部の白洲の場におけるいちと役人が対峙するありようの再吟味をはかり、そこには権力の威圧を背後に控えた利己主義と、無償の愛に裏打ちされた強い意志とのぶつかり合いが生じているという理解を呈した。

第5章では「高瀬舟」を取り上げ、従来の論が、鷗外の自作解題「高瀬舟縁起」に依拠して作品の主題に関する考察に傾きがちだったのに対して、そこに登場する二人の人物（庄兵衛と喜助）の言動や心理を捉えていく筆致には違いがある点に注目して、作品の読み直しを図っている。具体的には、庄兵衛の心理を特徴づける「疑懼」に、彼が「俗」なる世界の住人であることがはしなくも現れていると指摘、そんな彼からの視点をもってすれば「聖人」視される喜助であるけれども、彼の実際の言動はそうした庄兵衛の理解からは離れた人間性を示唆していると読み解いていく。そして、苦境や難題を前にしたときに喜助が体現していく能動性と比較することによって、喜助の出会いが庄兵衛にもたらすこの先の人生の可能性の有無についての推論も立てている。

第6章では「寒山拾得」を取り上げ、同時期の鷗外の陸軍軍医総監辞任と貴族院議員占席問題と密接な関係があるとされてきたこの作品を、小説の構成上の特徴を押さえることから考察を出立させている。すなわち、作中の大半にあって間接的な形でしか登場してこない寒山拾得が最後の厨の場面で初めて姿を現すという組み立ての背後には、従来の論がその典拠とみなしてきた活字としての古典に対するものだけではなく、寒山拾得をモチーフとする絵画に対する作者の関心があったことを俎上に上せた。また、聖と俗の対立の構図の下に組み込まれたり、儒・仏・道の代表者として類型化されて論じられがちであった各登場人物の人間像に関しても、たとえば豊干については、その言動を通してどの思想も排除せず、それらを自身の生の内に血肉化させていることを明らかにするなどして、人間が自身の「道」を求めていくありように関して、この作品がどういった問題提起を行っているかについての再検証を試みている。

第7章では「天籠」を取り上げている。大正4年の文学界において芸術至上主義の一翼を担った雑誌『ARS』創刊号に発表された「天籠」は、この時期鷗外と交友のあった青年画家宮芳平をモデルとした現代小説である。本論は、宮自身が書いた自伝的作品と比べて、小説の方は、新しい芸術の創造に向けて、新進画家の「M君」と彼の絵を審査した「私」との間に生じていく繋がりに照明を当てていることを確認した後、そこで見えてきたものが、この作品以前に発表された小説「羽鳥千尋」や、この時期刊行されていた雑誌『成功』の論調と密接なつながりを有していることを論じている。すなわち、同じく才に恵まれ前途に夢を抱いて歩み出してみても、その先で悲運に見舞われることもあれば、運命の寵児となり得ることもあるというように、今日の青年が置かれている現実を相対化するビジョンを、作品の総体は指し示しているとの結論に達している。

第8章では、小倉時代に鷗外が知り合った、後に第一高等学校ドイツ語教師となった福間清と、大平山安国寺僧侶玉水俊媿をモデルとして書かれた「二人の友」を取り上げ、そこに登場する「F君」「安国寺さん」「私」の交流図を通して見えて来る、学問と人生との関わりについて考察している。つまり、両者が「安国寺さん」にドイツ語を教える際に、口語でも文語でも全体として扱う「私」と、語格から教え込もうとする「F君」という違いが生じ、それにより本来聡明な「安国寺さん」が苦しむという出来事を通じて、学問を愛することと学問に縛られることが、人間の生に対してどのような影響を与えていくかについて、鷗外が長らく問い続けて来た問題を読み取る必要があると論じている。

論文審査結果の要旨

本学位申請論文は、大正期の鷗外の歴史小説・史伝を考察するにあたって、対象作品を大正3年から5年にかけて発表された歴史小説6篇に的を絞り、それらの再定位を図るとともに、同時期の現代小説2編も取り上げ、それによってこの時期の鷗外文学のありようを総体的に捉えようとしたものである。

むろん、対象作品をこのように限定しても、それぞれに関しての先行研究は相当の厚みを有している。それに対して論者は各章で、そこで取り上げた作品の主人公の人間像や、登場人物相互の人間関係の再検討に重きを置いた考察を展開していく。それは、ある意味ではオーソドックスな進め方であるかもしれない。しかしながら、そういった過程の中であって論者の考察は、「歴史其儘と歴史離れ」という作者の言葉や、雑誌『青鞥』などが創刊されていく同時代の新しい動き、そしてまた鷗外が小説執筆にあたって参照したであろう典拠などについての問題関心のもとにさまざまな形で進んできた従来の研究動向をふまえつつ、それらがまだ着目していない点や、十分な掘り下げがなされていない地平に届こうとしている。

たとえば「魚玄機」の主人公の出自を考察した箇所では、彼女が「倡家」出の女性であることを自明のこととする前に、鷗外が参照した逸話の中には彼女が「里家」出であるとしているものがあることも確かめ、その対比の中から前者が選択されている点に鷗外の意図が示されているとして、その内実を的確に押さえている。また、成長した魚玄機が咸宜観に入ったという故事をもとにして、そこで彼女が中気真術を知っていくという場面を用意したことについても、こうした房中術は当時であって道教の正統な修行としては認められていなかったこと、それゆえに格式を重んじる道場の一つである咸宜観でそれが行われることはなかったことを実証しながら、そうした事実を枉げてまでも魚玄機に如上の体験を積ませしていくことのうちに、詩と性をめぐってさまざまなドラマを演じていく女主人公像を創出しようとする契機が認められると考察している。これらの研究成果を論者は学会においても報告したが、いま改めて論文となったものを読むと、それは「魚玄機」の注釈的な研究としても一目置かれる側面も有していることも感じられる。

次いで現代小説についての考察に関しては、「天寵」を論じたものが印象に残る。鷗外が彼の絵を審査したことが機縁となって知り合った青年画家宮芳平が「M君」として登場する一種のモデル小説だが、論者はその中で「私」の目線で語られていく「M君」の置かれた立場を、この作品以前に発表された小説「羽鳥千尋」における主人公の青年像と比較し、前途有為の青年に対して鷗外がどのような思いを抱いていたのか、その実質に迫ろうとしている。さらに、同時代に出版されていた雑誌『成功』の存在に注目、綿密な検討を行うまでには至らなかったが、誌面に頻繁に現れてくる青年論の論調を整理しながら、「天寵」や「羽鳥千尋」が提示した青年像はそれを相対化していくものではないかといった結論を導き出している。歴史的なパースペクティブを持って、一篇の作品を広い視野のもとで考察したことは注目すべきである。

一方、本論全体を読み通した結果、気になる点もなくはない。その一つが、数々の先行研究の消化、吸収、整理にかなりの労力を費やした——それ自体はけっして否定されるものではないが——結果、自らの見解がそれらの集積の中に埋もれてしまい、論の独自性をいま一つアピールしきれていない傾向が見られたことである。もう一つは、対象とする作品群を一定の時期に限ってそれらの丁寧な分析や考察を試みたことはそれなりの意義を有していたとはいえ、やはりその前後にある歴史小説の出発点にあたる作品群や、「渋江抽斎」をはじめとする史伝との関係性についての言及がなされていないことは、鷗外文学が持ち得る価値についての見取り図を提示する一歩手前で已んでしまった感が残る。たとえば、論者が現代小説「天寵」と比較するために持ち出した「羽鳥千尋」については、この小説が鷗外の歴史小説の嚆矢を告げる「興津弥五右衛門の遺書」初稿と密接なつながりを持っているとする先行研究もあるのだが、それと対峙しうる見解までは論者は提示していない。とは言え、そのことによって本論文の考察が総体として持っている意義は減じられることはないし、こうした大きな問題に向けて挑んでいくのは、論者にとっては今後の課題となるものである。

以上、本論文審査委員一同は、2月15日に実施した公開発表会及び口頭試問による結果もふまえて、王晨野氏申請の本論文が「博士（文学）」の学位を授与するに十分値するとの結論に達したので、ここに報告いたします。